

研究調査報告

北九州市若松区惣牟田の石峯神社 及び山頂の石垣調査

田上 繁

(神奈川大学 名誉教授)

1 調査の経緯

共同研究「中世景観復元学の試み」では、2020年3月12日から14日まで、北九州市若松区惣牟田の石峯神社と石峯山山頂の石垣、祠の調査を実施した。本調査には、外部の専門家である金子浩之氏と松原典明氏、研究協力者の若宮幸一氏、地元協力者の田上亘氏、研究代表者である田上繁の5名が参加した。すでに、惣牟田集落、ないしは、惣牟田を含む小石地区（旧小石村）については、黒田官兵衛の「二十四騎」の一人竹森石見次貞の嫡男竹森清左衛門貞幸や、その弟新右衛門利友との関係がきわめて強かったことが明らかとなっている。

そもそも本共同研究は、竹森清左衛門貞幸の碑が何ゆえ若松区小石に存在するのかという疑問から始まった。『遠賀郡誌』⁽¹⁾には、竹森清左衛門貞幸について、次のような記述がある。

竹森清左衛門貞幸入道して道也といふ。其の墓小石区の内西山に在り。高さ三尺五寸、幅一尺八寸、表に清左衛門竹森公之墓とあり。

裏には公諱貞幸天正六年戊寅生于播州姫路。慶安二年己丑三月十日卒す、享年七十二。寛政二年庚戌五月、八世裔孫貞恒再建と銘せり。法名を性屋道也という、……

このように、碑の正面には「清左衛門竹森公之墓」と刻銘され、裏面には清左衛門が天正6年（1578）に播磨国姫路で生まれ、慶安2年（1649）3月10日に72才で没したと記している。この碑は、寛政2年（1790）、末裔の八世竹森貞恒によって再建されたものである。『筑前国続風土記拾遺』⁽²⁾にも、「小石村」の項で紹介されている。小石村に関しては、「若松村の西に在て北海に臨めり。人家三所にある。本村及菖蒲谷・荒尾手谷に在」と記す。続いて4項目の特記事項が書き上げられ、その一つに「竹森清左衛門貞幸墓（菖蒲谷に在）」と竹森清左衛門の「墓」について触れている。注目されるのは、菖蒲谷が小石村の三集落の一つを構成し、清左衛門の「墓」がその菖蒲谷にあったと述べている点である。『筑前国続風土記拾遺』は、小石村が属する遠賀郡の場合、文政4年（1821）に調査が行われ、同6年に完成したとされる。文政6年は碑が再建され

た寛政2年より後年であるが、それ以後に菖蒲谷にあった碑を現在の位置に移動させた可能性もあり、今後それらの整合性を追究する必要がある。また、惣牟田に接する菖蒲谷が当時のどの範囲を指していたのか明らかにななければならない。

ところで、竹森清左衛門の動向については、これまでの調査、研究でかなり鮮明になってきた。文禄元年（1592）の朝鮮出兵に出陣したこと、土木技術にたけ、江戸城や大坂城の普請に関わったこと⁽³⁾、などといった事柄はよく知られているが、最初の妻とした「二十四騎」の吉田長利の娘に先立たれた後、織田信長の八男信吉の娘、つまり、信長の孫娘を妻に迎えている点は注目に値する。『寛政重修諸家譜』⁽⁴⁾には、その孫娘について「竹森清左衛門某が妻となり、のち紀伊家につかふ」との説明を加え、また、京都にある織田家の菩提寺総見院に建立された孫娘の碑にも、「竹森清左衛門室」と妻を意味する文字が刻まれている。

さらに、この孫娘は、二代將軍徳川秀忠の妻であるお江（江姫）の娘「天真院」に仕えた人物である。天真院は紀州徳川家との関係があり、貞幸の間に生まれた竹森伝左衛門幸保は紀州藩の家臣となって300石の知行地を与えられている⁽⁵⁾。後妻を迎えた経緯は、『吉田家伝録』⁽⁶⁾に詳しい。そこでは、「貞幸ノ後妻ハ織田武蔵ノ守信吉ノ女メニシテ織田長兵衛ノ尉信之ノ妹ナリ 此ノ女メ後紀伊大納言頼宣卿ノ招キニ応ジテ東武二往キ 民部卿ト号」と記すのである。

このような竹森清左衛門の動きであったが、寛永15年（1638）の島原の乱で一番乗りの戦功を挙げたにもかかわらず、同20年に2500石の領地を没収されてしまう。同じく『吉田家伝録』は、この間の動静を次のように記す。

同年十一月下旬貞幸ノ領地没収セラレ 宗像郡池田二屈居シテ道也ト号ス 此ノ年六十六歳 正保元年甲申ノ歳貞幸ノ弟竹ノ森新右衛門利友ノ采地遠賀郡島郷小石村ニ移ツテ閑居ス …… 慶安二年己丑ノ歳三月十日腫瘻ヲ病ンデ小石村ニ死ス 寿七十二歳 同郡若松浦吉祥寺ニ葬リ 性屋道也居士ト称ス

こうして、清左衛門貞幸は、正保元年（1644）、弟



の新右衛門利友の領地である小石村にやって来て居住することになる。また、新右衛門利友に関しては、惣牟田の入り口付近の山中に「新右衛門尉抱山」と刻銘された石碑があり、竹森兄弟と惣牟田との結び付きの強さがうかがわれる。なお、清左衛門貞幸は、慶安2年(1649)3月10日、小石村で^{かくいっ}腸噎(食道狭窄症)のため没した。若松浦の吉祥寺に葬られたが、墓石は確認できていない。

2 石峯神社の創建とその変遷

今回の調査では、石峯山の中腹に鎮座する石峯神社の調査と山頂の石垣の調査を主たる目的としていた。まず、石峯神社の調査により、神社の創建者と頂上から中腹へ遷座した年代が判明した。

現在の石峯神社は、旧石峯神社の北北東230mで標高220mの位置に所在する。山頂にあった旧石峯神社は、山頂西側に参道があったとされるが、現在の神社では、石峯山北に位置する惣牟田(標高130m付近)の



写真1 石峯神社の鳥居と参道



写真2 石峯神社の拝殿

集落から南に石峯山を登り社殿に到達するように参道が伸びている。社殿は、標高約220mの地点を平たく削平し、広さ10m四方程度の範囲に東向きに建てられており、拝殿とそれに繋がる流造りと思われる半間四方の本殿から構成される。拝殿内の長押正面右には寄付の木札が打ち付けてあった。加えて、拝殿内長押北側には、本殿の建築などに関する棟札が5枚打ち付けられている。

写真3の一番右の棟札が最も古く、そこには、下記のような内容が記載されている。

紀元二五四九年明治廿二年己丑十一月吉辰

石峯神社社殿再建

祠堂兼少講義	伊高繁壽
石峯村長	高嵩養敬
全村大字小石区長	高嵩正三郎

	小熊孫平
	高嵩藤助
世話人	村田只平
	大庭喜八

大工棟梁 本郡若松村

小野田□衛門

これは、紀元(皇紀)2549年(明治22年・1889)に石峯神社が再建されたときの棟札である。伊高繁壽が少講義となり、石峯村長の高嵩養敬と小石区長の高嵩正三郎が中心的な役割を担い、これを小熊孫平、高嵩藤助、村田只平、大庭喜八が世話人となって再建されたことが分かる。また、末尾に修復時の棟梁として、若松村の小野田□衛門の名が記されている。この棟札の存在は、石



写真3 現在の地に遷座されたときの石峯神社の棟札(右)

峯神社が明治22年に石峯山の山頂から中腹に遷座されたことを物語るものである。ところで、石峯神社鳥居付近には、下関要塞地帯標（石柱）が現存する。明治20年代に軍事上の問題から防衛施設が整備されるが⁽⁷⁾、石峯神社の遷座もそのことと関係するのかも知れない。

なお、山頂にあった旧神社がいつ建てられたかは、棟札が見当たらないので不明である。しかし、若宮氏が指摘されるように、前出『遠賀郡誌』から創建者と創建年代が判明する。

石峯神社 無格社

修多羅区石峯山上に在り。祭神宇賀魂神也。祭日は十月十二日、宝暦五年乙亥十月、竹森主仙清原昌直の嫡男八兵衛清原利勝の建立せるものなり。当社今は山腹に下り、小石区惣牟田より藤木に通ずる道に面せり。

社の下方五、六町にして道也といふ処に竹森家の墳墓あり、多く宝暦二年より五年、八年頃に卒去の墓銘あり、或は同家鎮守の神なりしものか、将た隠岐谷といふ所に石垣ありて城址の存するものあれば、或は隠岐守の鎮守神なりしか明かならず。

この記述によれば、石峯神社は宝暦5年（1755）に創建された。創建者は、竹森主仙清原昌直の嫡男八兵衛清原利勝であった。竹森氏に繋がる人物であることは疑いない。竹森氏の先祖は平安時代、出羽国で勢力を持っていた清原武則であるという⁽⁸⁾。その子孫貞俊が猪上左近太夫を名乗って播磨国に土着し、加古郡大野の日岡神社（兵庫県加古川市）の宮司になった。天文19年（1550）に竹森石見次貞は生まれたが、その父を猪上新兵衛俊久といった。俊久は、田畑70町を持つ有力な神官武人であったとされる。永禄2年（1559）、敵対する武将から夜襲を受けて神社は全焼した。そのため、屋敷跡には竹藪が残るのみとなり、里人に竹森殿と呼ばれるようになったという。したがって、引用中の「清原」なる苗字は、猪上や竹森を名乗る以前の名であり、石峯神社の創建者が竹森氏に関係する者とみなして大過なからう。

記述中にある「道也」と称される場所には、現在でも竹森家の墓碑群がある。惣牟田集落の奥部を南に上がった丘陵西斜面の「殿様墓」と伝承される場所が、それに比定される。この「殿様墓」の本格的な調査は前年度に行ったが、墓碑の配置は、花崗岩製の自然石（転石）を利用した墓碑が一行に3基並ぶ。3基の墓模様は同じで、扁平な自然石の基壇を置き、その上下膨れ状の高さ90cm前後の自然石（花崗岩）を据え碑と成している。正面からみて中央の碑はやや小振りで銘文正面に「風吟幻林童子」、裏面に「宝暦戊寅天七月十六日」と刻まれており、子供の碑と思われる。左右の碑文は、以下の通りである。

右側の碑

[正面] 明和二乙酉天
緑樹院松岩素仙居士

[裏面] 五月十六日
実父大音与兵衛義直
二男竹森九右衛門政直
行年七十五歳卒

左側の碑

[正面] 峯樹院智覚妙量大姉

[裏面] 宝暦八戊寅七月廿五日
竹森九右衛門政直書

右側の碑文に登場する竹森九右衛門政直は、前出の「竹森家記」や「吉田家伝録」によれば、竹森次貞の八男新右衛門利友の曾孫にあたり、孫の新之丞実信が無嗣であったため養子として迎えられた人物である。その養子の実父は大音与兵衛義直であり、その二男が養子入りしたことが分かる。大音家も播州のころから黒田家に仕えており、「分限帳」などで確認できる家柄である。そのような意味からも同格の家として迎え、「峯樹院智覚妙量大姉」を妻として娶ったのである。夫婦養子のような状況であったと考えられる。妻の「峯樹院智覚妙量大姉」が宝暦8年（1758）に先立ち、政直が墓所を造営し、7年後の明和2年（1765）、政直も没したため、同所に葬られたものと把握できる。墓所の前側には、2基の小さな墓石がある。幼名の戒名が刻銘されており、政直の孫にあたる子供たちの墓石と推測される。前出『遠賀郡誌』でも触れているように、没した時期が近いことから、何らかの事情、たとえば、流行り病などで苦しむ竹森家の鎮守として石峯神社が建立された可能性もある。いずれにせよ、竹森新右衛門利友の系譜を引く人たちが、惣牟田と竹森氏との結び付きがここでも確認される。

3 石峯山頂付近の石垣調査と祠調査

今回の調査におけるもう一つの目的は、石峯山山頂にある石垣群の築造年代を確定することであった。前出の引用文にも記されるように、近隣の菖蒲谷の山奥には、戦国期に築造された大庭隠岐守の別宅の跡とされる石垣が二段にわたって現存しており、山頂の石垣もそれに類似する石垣ではないかという予測から調査を敢行したものである。

結論からいえば、石垣の積み方やその形式などから古いものではなく、石峯山は戦争時には高射砲が設置された場所であったことから、斜面の土留めや建造物を建設する場所の確保のために築造された軍用石垣であったと考えられる。そのほか、今回の調査では、山頂に江戸



写真4 石峯山山頂付近の石垣群



写真5 福岡藩旧家臣による明治6年創建の「惣牟田神社」の祠

期の信仰まで遡れる可能性を秘めた祠があるのを発見した。山頂から北へ15m、標高差で3mくらい降りた山中に位置する小さな砂岩製の祠である。祠は砂岩製の板状部材3枚を組み合わせ、屋根をのせる形式である。背面と左右の内側に銘文が刻まれて、その中に御神体の石が祀られている。銘文は、次のような文言となっている。

①背面
明治六年^(ママ)申年
惣牟田神社
十月十二日

②左側面
願主
黒田家
矢野馨□

③右側面
(銘文があつたが剥離が著しくて判読不能)

①で明らかなように、これは、「惣牟田神社」として明治6年(1873)に祀られた祠であり、②の銘文から

「黒田家」に縁のある「矢野馨□」が寄進した祠であることが分かる。「黒田家」の銘文から、上述した石峯神社の寄進が黒田家の家臣竹森氏によってなされたことと関連があり、神社や祠など信仰面に関する建造物を寄進するという行為を通して領地の惣牟田集落と黒田家が結び付いている様子がかがわかる。

本共同研究の課題は中世的な遺跡、遺物の抽出も目的にしているが、同時に遺存しない場合、中世的な要素の伝承に注目する点に学問的特徴がある。最近、惣牟田の村田光代さん、白石節子さん姉妹の記憶を頼りに踏査したところ、これまで知られていなかった軍事用の射撃訓練施設が菖蒲谷の山中で発見された。標高302.4mの石峯山は若松で最も高い山であり、重要な要塞地帯として今も戦争遺跡が数多く残る。軍事道路が整備され、高射砲の設置とそれに付随する諸施設や兵舎、水槽などの建造により、石峯山や惣牟田周辺の景観が大きく変化したことは否めない。そのような状況下で、非文字資料の石造物や伝承、記憶をもとに歴史遺跡の発掘に力を注がなければならないであろう。

【注】

- (1) 『遠賀郡誌』(社団法人遠賀郡教育会、1917年)。引用に際しては、必要に応じて句読点を付した。他の引用部分でも同様である。また、明らかな誤字は正字に改めた。
- (2) 『筑前国統風土記拾遺』(筑前国統風土記拾遺刊行会、1973年)。ここでは、小川賢氏が2000年に「遠賀郡」部分を復刻した『筑前国統風土記 拾遺「遠賀郡」』の記述に拠った。
- (3) 『福岡県史 近世史料編 福岡藩初期(上)』(西日本文化協会、1982年)や『竹森家記』(九州大学中央図書館蔵)などに記されている。
- (4) 『寛政重修諸家譜 第8』(統群書類従完成会、1984年)。また、『系図纂要 第7冊下』(名著出版、1995年)にも「初竹森清左衛門妻 天真院宮侍母民部卿局」との記載がある。
- (5) 『南紀徳川史 第七冊』(復刻版、清文堂出版、1990年)にこの間の記述がある。
- (6) 『福岡藩 吉田家伝録 上巻』(太宰府天満宮、1981年)。
- (7) 『北九州市史 近代・現代 行政 社会』(北九州市、1987年)。
- (8) 本山一城『黒田官兵衛と二十四騎』(宮帯出版社、2014年)。

【付記】

竹森家の末裔でもある竹林和夫氏からは、自ら調査し収集された関連資料の提供を始め、貴重なご助言をいただいた。記して謝意に代えたい。